

アイヌ社会では、稀に例外があったかもしれませんが、仕事の分担は、女性は家事や山菜の採取、畑仕事、衣服作り、男性は漁業・狩猟や力仕事と分かれていました。食料は全



出産と育児

佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター
調査研究部研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレイ国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モントレイ校)通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

て自然から調達していましたから、妊婦であるからといってゆっくり休んでいる暇はなく、女性たちは出産間際まで働いているのが常でした。

興味深いのは、妻の出産は男性の生活にも大きく影響していたことです。出産が間近になると、男性は漁猟に出かけません。出産に限らず、怪我や葬儀、体調不良の場合も同様です。具体的には、出産予定日の6日前から夫は家を出て身内、親戚や友人宅などに身を寄せ、出産の安全を祈り、身を慎んで生活します。男性の無作法な言動は妻の苦しみを増すといえます。夫の謹慎は、妻の苦渋を思いやり、妻の苦しみを分かち合うことで安産とするためなのです。出産後夫は自宅に戻り、妻の産後の肥立ちのための6日間は、やはり仕事に出ず静かに過ごすことになっています。この間、漁や狩猟に出ても絶対に運に恵まれないどころか、変事の発生原因ともなるといわれます。また、一切の物を捨ててもいけません。「物」にも魂があるので、捨てられた「物」の思いが妻の産後の肥立ちに影響を及ぼすからです。現代でもこの禁忌を大切にし、守っている方達もいるそうです。この約束を守らないと、守護神、イトゥレンカムイ(i-我々turen-に憑くkamuy-神)ばかりでなく他の神々からも多くの怒りを買ひ、最も霊力の低い生まれたばかりの子どもをはじめ、他の子や年老いた父母にまでに災いが及ぶともいわれています。このことから、病院はおろか産婆もいなかったアイヌ社会で、出産がいかに危険な事柄と考えられていたかがよくわかります。

6日間の養生期間が終わり、床上げして仕事を再開すると、日中、赤ちゃんは祖父母や年長者が世話することになっていましたが、農作業のため畑に連れてゆくこともあり、母親

が働いている間、生まれたての赤ちゃんは梯子型の台の上にヨシで編んだゴザを敷いた吊り下げ型の揺りかごに、縦長の小袋に入れられて仰向けに寝かされたうえ、揺りかごに結び付けられた1本の紐で千鳥がけに縛られ、日差しを避けて軒先や木の枝などから吊り下げられていました。赤ちゃんを紐で縛るのは、狭い産道から体型をよじって出てくる際に骨格にずれが生じるので、関節など骨の位置を整えるためだったのです。赤ちゃんにしてみると縛られているのは意外と快適であるらしく、夜泣きをする子は、抱いてあやすよりも毛皮などできつく包むと不思議に泣き止みます。丁度、お母さんの体内にいた状態になるからとのこと。さらに、揺りかごが外に置かれることで、赤ちゃんには葉擦れの音や鳥の声が聞こえていたはず。脳の発達には自然界の刺激が最も有効だといわれています。

首が座ると、赤ちゃんは素裸のまま母親の背中に入れました。これは子どもの体温が下がるのを防ぐと同時に、排泄や授乳のタイミングを知るための工夫でした。あるアイヌのお婆さんは、背中の赤ちゃんの動きでおしっこやうんちをしたがっているかがわかるので、10人からの子どもを育てて、一度として背中で粗相をされたことがないと言っていたそうです。この方式だと、オムツは必要ありません。また、母親たちは、赤ちゃんの泣き声の違いで何を欲しているかを聞き分けることができたそうです。このように密接な母子関係は、子どもの情緒的発育に良い影響を及ぼしていたに違いありません。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大學北海道短期大学部(滝川市)で開催のペカンベ祭で伝統料理を提供している。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『知里真志保フィールドノート(6),(7)』(北海道教育委員会、2007、2008年)、『平成20~令和3年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~12』(北海道教育委員会、2008~2021年)等。